

Title	「作文」という授業に協働学習を取り入れることの意義の一考察： 作文上級クラスのreflectionシートの分析を通して
Sub Title	
Author	石塚, 京子(Ishizuka, Kyōko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2023
Jtitle	日本語と日本語教育 No.51 (2023. 3) ,p.97- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告1
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20230300-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「作文」という授業に協働学習を取り入れることの意義の一考察

—作文上級クラスの reflection シートの分析を通して—

石 塚 京 子

1. はじめに

2022年度春学期より作文上級クラスを担当することになった。作文クラスは以前から受け持っていたが、シラバス作成の際に改めて何を目標とし、授業をどう運営しようか、特に上級クラスにおける作文＝「書くこと」は何を重要視すべきなのかを考え直してみることにした。『国際交流基金日本語教授法シリーズ第8巻「書くことを教える」』（2010）では、「書くこと」は文字を使った書き手と読み手のコミュニケーション手段であると言えることができると述べられている。更にコミュニケーションと言うと人と人との「やりとり」が思い浮かぶであろうが、自分の考えや意見、調べたこと、やったことなどについて相手に説明し、理解してもらうために書く場合も「ほかの人に何かを伝えるために書く」という点でコミュニケーションと言えることができると記述されている。野口・森田（2003）には、文章を書くときに大切なことは読む人のことをよく考えることであると明記されている。そこで、作文上級の授業では、「書くこと」はコミュニケーション手段であること、つまり自分の書いた作文が誰かに読まれることを想定しながら書くことを授業方針の一つとして掲げた。通常の作文クラスでも学習者が書いた作文を担当教師が読んで添削するため、書き手である学習者は教師という読み手を意識して書いていると考えられる。しかし、

作文上級では読み手を教師に限定せずクラスメートにまで広げ、学生間でお互いの作文を読み合っって意見交換する活動を学期中に2回設けた。これを「読み合い」と呼び、協働学習の考え方に基づいた活動と捉える。本稿は作文という授業にこの「読み合い」を取り入れることで学生は何を学び、どう成長したのかを分析し、その意義を考えるものである。分析には「読み合い」の後で学生が書いた reflection シートを用い、学生は何を振り返り、どのようなことに気づき、どう変容して成長したのかを考察する。

2. クラス概要

本稿は、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センターの日本語研修課程に設置された科目「作文上級」において2022年度春学期に行った授業の内容に基づく。この章では以下にクラスの概要を示す。尚、この学期も新型コロナウイルス感染拡大防止のために「Web 会議システム」を利用したオンラインによる授業形態がとられた。

【履修者数】8名（出身地と性別は表1の通りである）

表1 「履修者の出身地と性別」

呼び方	出身地	性別	呼び方	出身地	性別
学生 A	台湾	女性	学生 E	中国	男性
学生 B	ヨーロッパ	男性	学生 F	台湾	男性
学生 C	台湾	女性	学生 G	台湾	男性
学生 D	台湾	女性	学生 H	ヨーロッパ	男性

（個人情報保護のため、8名の学生を学生 A～学生 H と呼ぶことにする。学生 B、学生 H の出身地をヨーロッパとしたのは国籍を明記すると学生を特定できる可能性が生じるからである。）

【教材】 担当者作成教材

【目標】 クラスの到達目標は自分の言いたいことを確実に、かつ論理的に伝える表現力を習得することである。具体的には次の①～③ができるようになることを目指した。

- ① 社会問題や文化について説明する
- ② 問題が起きる原因・理由、背景を考察する
- ③ 自分の意見を述べる

【使用した Web 会議システム】 Zoom

【授業形態】 リアルタイム方式+オンデマンド方式

リアルタイム方式とは web 会議システムを使用した対面授業、オンデマンド方式とは自分の都合に合わせて作文を書き、授業支援ツールを利用して期限までに作文を提出することを意味する。作文上級は、この組み合わせで成り立っている。

【授業の進め方】 作文上級の授業は以下の (1) ～ (5) の順に進行する。

(1) ～ (3) が Zoom で行うリアルタイム方式、期限までに作文を提出し、評価と添削された作文を受け取る (4) (5) がオンデマンド方式によるものである。

- (1) 前の回の作文の feedback を受ける。
- (2) 新たなモデル作文を読んで、その段落構成を考える。書くために必要な文型や言葉の説明を聞く。
- (3) (2) のモデル作文の段落構成を参考に、与えられたテーマに沿って各自が段落構成、内容を考えてアウトラインを作成し、教師のチェックを受ける。
- (4) (3) のチェック後、提出期限までに作文を書いて提出する。

* 800 字程度の作文を「である体」(あるいは「だ体」)で書く。

* 辞書の使用やネット検索は可とした。

- (5) 提出した作文を教師が添削し、評価をつけて返却する。学生は返却された作文を清書して再提出する。

【授業内容】 中間試験までは説明文を、中間試験後からは意見文を書いた。中間試験と期末試験の前に、語彙・表現リストの作成と「読み合い」に1コマずつ使った。授業予定は表2の通りである。語彙・表現リストとは、作文を書いた際に新たに知り得た言葉や表現から積極的に覚えたいと思うものを20個選んで一覧にしたものである。その一部を中間試験と期末試験に出した。

表2 「授業予定」

回	授業内容	回	授業内容	活動方法
1	説明文 (テーマ等は表3参照)	8	意見文 (テーマ等は表3参照)	個人作業
2		9		
3		10		
4		11		
5	語彙・表現リスト1	12	語彙・表現リスト2	
6	読み合い1	13	読み合い2	協働学習
7	中間試験	14	期末試験	個人作業

【作文のテーマとその目標】 学期中に8つの作文を書き、そのテーマと目標は表3で示すものである。1回目と4回目は全員が同じテーマで作文を書いたが、他の回は各自で○○や△△、××に言葉を入れ、テーマから考えさせた。それは、学生の興味や関心がそれぞれ異なり、自分が書きたいテーマで書いた方が書く意欲を高め、オリジナリティーのある内容となるのではないかと考えたからである。

表3 「テーマとその目標」

回	テーマ	目標
1	頑張ったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・説明する。 ・原因・理由、または背景を考察する。
2	〇〇（語を定義する練習）	
3	〇〇の意味するもの	
4	日本の魅力	
8	〇〇に△△は必要か	<ul style="list-style-type: none"> ・説明する。 ・原因・理由、または背景を考察する。 ・意見を述べる。
9	〇〇があるいるから△△は××だ	
10	〇〇する最良の方法	
11	今、なぜ〇〇が求められるのか	

*2回、3回、および8回～10回にはモデル作文がある。

3. 「協働」の概念と授業デザイン

本稿は「作文」という授業に協働学習を取り入れることの意義を考えるものである。そこで、この章では本稿の重要な概念となる「協働」についてまとめ、どのように作文上級の授業デザインを行ったかを説明する。

池田・館岡（2007）では、日本語教育における協働とは、多文化背景の者同士の「対等」を認め合い、互いに理解し合うために「対話」を重ね、対話の中から共生のための「創造」を生み出すべきものだとし、ピア（peer：仲間）と協力して学ぶ（learn）方法をピア・ラーニングと呼んでいる。

大島他（2014）によれば、ピア・ラーニング（協働学習）とは、学生同士等が対等な関係において協力して学び合う考え方のことで、この考え方に依拠した活動（ピア活動）では参加者間の対話のプロセスに学びの創発があると考えたと述べられている。また、ピア・ラーニングにおける学びは、①「学生が自分も相手もお互いに貢献できる互惠的存在であること」（相互リソース化）、②「対話から『問い』が生まれるプロセスを重視すること」（批判的思考の獲得）、③「背景の異なる多様な『他者』と向き合い、

認め合う態度を身につけること」(社会的関係の構築)の3点にまとめることができる。加えて、ピア・ラーニングに基づく教室運営では、教師には学生同士の相互作用によって生み出されるお互いにとっての新しい成果を、活動に関わる全員が実感できるような活動をデザインし、支援する役割が求められると記されている。

作文上級においては協働の概念を念頭に置いた「読み合い」という活動を授業の一部に取り入れて、文化背景の異なる学生同士が対等に話し合い、その中で全ての学生が何かを学んで成長できるように授業のデザインを行うことにした。協働学習による学びは多く伝えられているが、毎回の授業を協働学習とはしなかった。それは、書き手である学生がどのような内容をどう表現するかを一人でじっくり推敲する中で、これまでに学んだ知識を整理して自分なりの洗練した文章を作り上げる過程も大切だと考えたからである。この一人で推敲して作文を書く時間と「読み合い」の活動を組み合わせた授業計画を作成し(表2参照)、実施した。

協働学習の考え方に基づいた「読み合い」の活動を取り入れると、どのような利点があると考えられるであろうか。学生は表3に示した毎回出されるテーマに沿って目標を達成すべく一人で静かに推敲しながら作文を書き上げる。「読み合い」がない授業では、学生は常に評価者でもある読み手の教師を頭に思い浮かべながらこの作業を黙々と行って作文を完成させ、目標が達成できたかどうかの判断を一人の教師に委ねることになる。作文上級クラスの狙いは自分の言いたいことを確実に、かつ論理的に表現する力を習得することとなっているが、教師の評価も添削も日本語の正確さや日本語らしさを重視する傾向になることは否めずそこに焦点を合わせがちになる。これでは読み手を意識して書いても日本語に間違いがないかが最大に関心事になる。しかし、作文上級で学習する学生は日本語学習終了後に日本での進学や就職を目指すことが多く、その特性から間違いのない日本語が書けるようになるといった日本語力の向上だけを追求するだ

けで十分とは言えず、自分の考えを相手に正しく伝える力、相手の考えを適切に理解して検討する力の育成も欠かすことはできないと考えた。この伝える力と理解する力を習得するには、一人で推敲して作文を書くことに加えて協働学習による学び合いが必要であると考え、作文の授業の一部に「読み合い」の活動を取り入れた授業デザインを行い、授業を遂行した。

4. 「読み合い」と reflection シート

2章のクラス概要の表2「授業予定」における6回目と13回目の「読み合い」の後で、200字程度の reflection シートを提出させた。石塚（2021）で述べているように reflection シートの提出には重要な意味がある。

ここで「読み合い」の詳細を説明する。「読み合い」とは、中間試験までに書いた4つの説明文、期末試験までに書いた4つの意見文の中からクラスメートにぜひ読んでほしいと思う作文を学生自身がそれぞれ1つ選び、グループ内で回し読みをするピア活動のことである。2022年度春学期の履修者数は8名だったので、2つのグループに分けて実施した。グループ分けと選んだ作文については、表4にまとめた。作業の手順として、クラスメートの作文を読み、①分からない言葉や言い回しなどがあったら書き手に質問をする、②相手の作文の良い点をほめる、③改善したらもっと良くなると思う点について意見交換するようにと教師から説明した。①から③の「読み合い」の作業を通じて自分の作文の良い点や至らない点に気づくことができる。

しかし、reflection シートを書く作業がなければ、学生は何となくわかったような気がするという感覚で終わる可能性が高いのではないであろうか。reflection シートについては、石塚（2021）で「これを書くことで学生は自然と協働学習による活動を振り返り、じっくりと自問自答しながら内省する機会を得ることができる。更にその内省した思考過程を外化することによって思考が整理される。学生は reflection シートを書くために、活

表4 読み合いのグループ分けと使用した作文テーマ

学生	読み合い 1		読み合い 2	
	グループ	テーマ	グループ	テーマ
D	A	日本の魅力	B	〇〇があるかから ×× は～だ
H		日本の魅力		今、なぜ〇〇が求められるのか
A		日本の魅力	A	〇〇に△△は必要か
E		〇〇の意味するもの		今、なぜ〇〇が求められるのか
C	頑張ったこと	今、なぜ〇〇が求められるのか		
F	日本の魅力	今、なぜ〇〇が求められるのか		
B	B	〇〇の意味するもの	B	〇〇に△△は必要か
G		日本の魅力		今、なぜ〇〇が求められるのか

動を振り返る → 自問自答しながら内省する → 思考を整理する → 外化する、といった一連の作業を行っている」と述べた。作文上級においても同様に reflection シートを書くことで、学生は整理した思考を外化して何となくではなくはっきりと学びにたどり着くと思われる。一方、教師はオンライン授業では画面越しに「読み合い」を外側からしか観察することができないため、学生の変容を十分に把握することは難しいが、このシートに記述された内容を読むことで学生の成長をより明確に知ることができる。このように reflection シートの提出は学生にとっても教師にとっても重要な意味がある。

【読み合いのグループ分けと選んだ作文】

グループ分けは同じ出身地の学生ばかりで構成しないように注意した。「読み合い」で使用した作文は比較的書きやすいテーマ、あるいは教師からの評価点が高いものが選ばれる、つまり、学生 F が reflection1 のシートに「自分の書いた作文に自信がなかったため、選ばなかった別の

テーマにした作文を読むことができた」と書いているように、自信がないものは避けられる傾向にあるようである。

5. 分析

この章では、「読み合い」の後で学生が書いた reflection シートから実際に学生は何を学び、どう成長したのかを分析する。

大島他（2010）には、「ピア活動」とは仲間同士が話し合いを通じて協力的に学習を行う方法であり、ピア活動の意義は（1）「ピア活動によって仲間同士が協力的に学習を行えば知識の探求が促進される」、（2）「ピア活動を行うことで文章作成の過程でも効果的な学習ができる」、（3）「読み手に伝わる文章を作成するには「ピア・レスポンス」が有効である」、（4）「ピア活動に参加することは学習環境を自ら作ることでもある」と述べられている。本稿における「読み合い」の活動は「ピア活動」に相当する。そのため「読み合い」の活動にも（1）～（4）の意義があると考えられる。reflection シートを分析する前に、（3）にある「ピア・レスポンス」についても大島他（2010）から説明しておく。レスポンス（response）とは、質問、感想、意見、アドバイス等、文章を検討する時の発言の全てを意味する。ピア・レスポンスとは、仲間同士がお互いの文章をよりよくするために話しあい、そこで議論されたことを参考に、書き手が文章の構想を練り直し、推敲を重ねていく学習方法のことを指すと書かれている。ここでのピア・レスポンスは1つの作文を完成させる過程でのピア活動が想定されている。一方、作文上級では「お互いの文章をよりよくするために話し合い、議論されたことを参考にする」という目的は同じであっても、「読み合い」は1つの作文を完成させる過程での活動ではなく、新たに次の作文を書く準備過程での活動であり、ここが大島（2010）とは異なる。

それでは、ここから reflection シートの記述を大島（2010）のピア活動の意義（1）～（4）に従って分類していくが、（1）（2）（3）（4）をはっきり

線引きするのは難しく、複数の項目にまたがると考えられるようなものもあった。そこで、本稿においては、(1)と(2)は書き手として、(1)他者の知識の再構成（他者の作文からの知識の獲得）、(2)今後の文章作成につながる知識の獲得（他者の意見からの知識の獲得）、という視点から分類した。(3)は読み手としての視点から、(4)は社会的な人間関係の構築といった点からそれぞれまとめた。

全ての reflection シートは資料1（1回目の reflection シート）、資料2（2回目の reflection シート）として巻末に掲載している。資料の文はオリジナルのままで手を加えていない。そのため、筆者の理解と学生の意図することに乖離が生じている可能性もないとは言えないが、筆者の理解で分析を進める。尚、下線は筆者によるものである。

>

(1) 他者の知識の再構成（他者の作文からの知識の獲得）

学生 B：語彙幅が非常に広い人もいたようで、自分の日本語力不足によって調べないことには分からないところがたくさんあった。

学生 C：皆さんは難しい語彙や文型が上手に使えることです。皆さんは本当にすごいと思って、勉強になりました。

学生 C：自分ももっと日本語の本や文章を読んで、語彙や文型や文章の表現について、勉強しようと思っています。私も日本語が今より上達になりたいです。

学生 D：他の文言を引用して書くという方法を真似してみようと思う

学生 H：私はクラスメートの文章の構成に驚いた。まず、彼らの接続詞の使い方がとても上手で、授業の後に彼らが使用した接続詞を表に書いた。

学生 H：段落構成なども良くできていて、内容に段落ごとに区切りを付けていて、この点も勉強になった。

学生 H：お互いの作文を比較することで、自分の間違えを見つけ出すことや書き方を工夫すること等を学んで、より読みやすい作文を書け

るようになる

これらの学生の記述は、クラスメートの作文を読んで自分と比較し、自分に何が不足しているかに気づいている。この点は、テーマに沿って目標を達成すべく一人で静かに推敲しながら作文を書き上げるだけでは決して気づけなかったことであろう。具体的な例として、学生 B「調べないことにはわからないところがたくさんあった」、学生 H「授業の後に彼らが使用した接続詞を表に書いた」からは、自分に欠けているものを発見してそれを補うための努力をしたことがわかる。また、学生 D「他の文言を引用して書くという方法を真似してみようと思う」の記述内容は一人では考えつかなかった新しい知識を得た例と言えるであろう。これらは、「読み合い」によって他者の知識を自分の中で再構成し、吸収しようとしていると捉えることができ、他者の書いた作文から新たな知識を獲得している様子が見られる。

(2) **今後の文章作成につなげる知識の獲得（他者の意見からの知識の獲得）**

学生 A：結論がテーマから外れたと言っていた。実は、この前、私もややそう感じていたが、メンバーが教えてくれない限り、自分の考えが確認できないので、読み合いを通じていい勉強になった。

学生 A：CさんとFさんは問題提起に対して理由や説明が少し足りない指摘した。私が気づいていなかった点なので、やはり自分の視点より他人の視点を借りることが大事だと感じた。

学生 B：「文章全体的に分かるために大事な言葉は説明した方がいいんじゃないか」この場合は変わらなくてもいいとする。

学生 B：「段落の繋がりが分かりづらく、もう少し分かりやすくした方がいい」前回も言われた気がするので、事実に基づいていると思う。自分なりにもっと繋がりがはっきりしているように工夫する

べきだと思う。

学生 B：私の作文の序文がよく書かれただそう。

学生 C：例を挙げる時、自分の本当に経験したことや具体的なことを例として書くと、説得力がある。

学生 E：説明文を書くとき、まず構成を考えなければならない。

学生 F：詳しく説明したり、具体例を挙げたりすると、理解しやすいだけでなく、文章の説得力も高める。

学生 G：私の挙げた例の因果性に対する説明が足りないということについて注意された。とてもありがたいと思う。

ここでの学生 A「結論がテーマから外れたと言っていた。メンバーが教えてくれない限り、自分の考えが確認できない」「CさんとFさんは理由や説明が少し足りないと指摘した。私が気づいていなかった点なので、他人の視点を借りることが大事だ」、学生 G「私の挙げた例の因果性に対する説明が足りないということについて注意された。とてもありがたい」は、よりよい文章を作成するには他者の視点が必要であることを述べている。また、学生 E「説明文を書くとき、まず構成を考えなければならない」、学生 F「詳しく説明したり、具体例を挙げたりすると、理解しやすいだけでなく、文章の説得力も高める」は、よりよい文章を書くには何が必要かに気づいた例と言えよう。このように、他者の視点を通すことで、一人では気づけなかった文章作成に関する自分の弱点を知るきっかけとなったり、よりよい文章を書くにはどうすればいいのか、あるいはよりよい文章にするには何が必要かを知ることになったりしている。これらの例は、「読み合い」の中で他者と意見交換をしたことで、文章作成の上達につながる有益な知識や情報を得ることができたと考えられるものであろう。

(3) 読み手としての分析的視点の育成

学生 A：メンバーの作文から問題点を探し出し、解決策を持ち出すことは想像以上に難しく感じた。色々な面白い作文を読み、いい経験ももらって本当によかったと思う。

学生 B：皆は以外と上級の文法を無理矢理に使おうとしない。そのため、皆の文章は流れが良くて分かりやすかった。

学生 D：Bさんの作文は内容がとても豊かだが、段落のつながりが不自然で、最後まで読まないと文章に書かれた例の意味が分からない。

学生 F：私たちの作文は補足説明が必要だという点では同じで、私はどのような状況や場面に触れていない。つまり、重要性が感じられる理由を書いた方が良い。

「読み合い」においては、一人の学生が書き手であると同時にクラスメートの作文の読み手となる。書き手としての学びについては(1)(2)で述べたので、ここでは読み手としての学びについて分析する。読み手として他者の文章から学べることには、学生B「皆の文章は流れが良くて分かりやすかった」といういい点や、学生D「段落のつながりが不自然で、最後まで読まないと文章に書かれた例の意味が分からない」といった改善点がある。この改善点を探し出すことで、書いた本人には理解可能な文章でも必ずしも他者の目から見て分かりやすいものとは限らないことを学生は身を以って知ることができるのである。また、この活動での読み手は、相手の作文を読んだ後で意見交換をしなければならないため、相手の作文を丁寧に読むことになる。丁寧に読むと相手の不十分なところに気づき、そこを具体的に質問したり指摘したりすることで分析的な読み方も身につけることができるようになる。これは相手のためだけでなく、ここで培われた分析的な視点で自分の作文も批判的に見ることができるようになる。例え

ば、学生 F「私はどのような状況や場面に触れていない。つまり、重要性が感じられる理由を書いた方が良い」のように自分の作文を自己分析し、解決策も述べている。このように一人の学生が書き手であると同時に読み手となることで、分析的にも批判的にも読む視点が生まれ、読み手に分かりやすい文章とはどういうものなのかが明らかになっていくのである。

(4) 社会的な人間関係の構築

学生 A：他のメンバーに私の作文を読んだら神社に行きたくなくなると言われてとても嬉しかった

学生 A：みんなが私の作文を通して、米国の銃撃事件に詳しくなって勉強になったと言ってくれた

学生 C：これは私の長所かもしれません。これからは引き続き日本語を勉強していくとともに面白い作文を書こうと思います

学生 D：自分の作文の良い点や違う点を知ることができ、とてもいい勉強だった

学生 H：私の作文が以前の読み合いから上達して、別人のようだと言ったことが一番印象に残った。色々悩んでいる今、このようなコメントを同級生から聞いたのはとても嬉しかった。

学生 H：Dさん以外のメンバーにも変化するところがほほないと言われたので、その点でも少しは自身を持つことができました。自分が満足することができる段階ではないので、これからももっと作文を書きたい

学生 A「他のメンバーに……と言われてとても嬉しかった」「みんなが私の作文を通して、……勉強になったと言ってくれた」からは、自分が誰かの役に立てた、貢献できたという喜びを感じていることがわかる。学生 C「これは私の長所かもしれません。これからは……面白い作文を書こうと思います」からは、今後の文章作成に対する意欲を感じる。また、学

生 H「私の作文が上達して、別人のようだとやったことが一番印象に残った。色々悩んでいる今、このようなコメントを同級生から聞いたのはとても嬉しかった」からは、学生 H が失いかけていた意欲を取り戻すことができたと考えられるであろう。更に、学生 C「これは私の長所かもしれません」、学生 H「メンバ=にも変化するところがほぼないと言われたので、その点でも少しは自身を持つことができた」からは、クラスメートから褒められたり支持が得られたりして自信を持ったことが窺い知れる。このように「読み合い」を通じてお互いに学び合うことは、日本語力や文章作成の向上といった学問的な学びだけではなく、人と人との関係を構築する社会的な学びにもつながると言え、クラスメートとともに自ら新たな学習環境を作っていると考えられる。

(5) その他

reflection シートの記述を分類していく中で、(1)～(4)には当てはまらないが、ある傾向を持つ記述があることを発見した。それが何であるか、そしてどのような意義あるかを考えてみたい。

学生 C：作文を読む人の視点や立場によって、感想は全然違う。

学生 D：時々、同じ段落でも、人によって、違う意見が出たことがあり、どっちの意見が良いかが分からないが、いろいろな意見が聞けて面白かった。

学生 E：自分の頭の中で、すでに当たり前だと思ふことも、他人にとって理解できない部分があるかもしれない。なので、意見文を書き終えてから、もう一度他人の視点から意見文を読む必要があると思う。

学生 F：この作文は、台湾人の視点から見る日本の魅力なので、日本人と同じ四季がはっきりしているヨーロッパに住んでいる人とは実感できないかもしれない。

学生 G：生徒たちが世界各地に住んでいるから、四季の変化に共鳴しない人は大勢いるかもしれないということを忘れてしまった。

まず、学生 C「作文を読む人の視点や立場によって、感想は全然違う」、学生 D「同じ段落でも、人によって、違う意見が出たことがあります」からは、人によって意見が違うという点に気づいたことがわかる。また、学生 E「自分の頭の中で、すでに当たり前だと思うことも、他人にとって理解できない部分があるかもしれない」、学生 G「生徒たちが世界各地に住んでいるから、四季の変化に共鳴しない人は大勢いるかもしれないということを忘れてしまった」は、自分にとっての当たり前が当たり前として通用しないことを知った例と言えよう。この2点は、今後グローバルな社会に出ていく学生にとって非常に重要な気づきであると考えられる。これは、作文上級クラスの狙いである自分の言いたいことを確実に、かつ論理的に表現する力を習得するといった日本語力の向上を目指すことから外れるかもしれない。しかし、相手の考えを適切に理解して検討する力の育成につながるもので、背景の異なる多様な他者を認め合う態度を身につけるといふ現実場面における社会実践としての学びであると考えられる。今後、学生たちは文化も社会的背景も異なる他者と共存していくことになるであろうが、まさに、この「読み合い」の活動がその共存の場であり、異なる他者とはどういったものかを知るきっかけとなり、社会に出る準備や心構えをする姿が見られた。

6. 考察と今後の課題

5章では、reflection シートから学生が「読み合い」を通して何に気づき、何を学んだかを分析した。ここでは、その分析をまとめ、「作文」という授業の一部に協働学習としての「読み合い」を取り入れることの意義を考察する。

まず、学生は「読み合い」を通して、他者の知識を自分の中で再構成して吸収したり、自分の弱点を知り次へのステップのきっかけとなる有益な知識や情報を得たりして、書き手として文章作成上の知識の幅を広げることができた。また、読み手としては、相手の作文だけでなく自分の作文も分析的な視点で見ることができるようになり、読み手にわかりやすい文章とはどういうものが明確化された。更には、このような日本語力の向上といった学問的な学びだけでなく、「読み合い」が人と人との関係を構築したり、人や社会の根本を知ったりできる社会実践としての学びの場にもなった。このように、「読み合い」には、大島他（2010）で書かれている（1）知識の探求を促進する、（2）文章作成の効果的な学習ができる、（3）読み手に伝わりやすい文章を作成するのに有効である、（4）仲間とともに学習環境を作り上げる、といったピア活動の意義が網羅されている。これに（5）社会実践の学びの場として提供できたことも大きな意義であろう。これは、協働学習として捉える「読み合い」は、他者であるクラスメートが存在すること、この活動が書き手だけでなく読み手を体験するものであること、この2点が大きな要因となっている。一人で黙々と書く「作文」の授業イメージとは大きく異なる「読み合い」を授業の一部に取り入れることで、日本語力の向上を補強し、個人作業だけでは身につかない社会的な学びも獲得できると考えられる。最後に大変興味深い学生の記述があったので、それを紹介する。学生Gは、「他のグループメンバーたちの作文を見ると、皆それぞれの考え方や興味を持つ議題も一目瞭然なので、作文の読み合いをすることが書くことよりずっと面白いと考えている」とreflection2の最後に記している。学生の興味はそれぞれ異なり、それを知ることができる「読み合い」が書くことより面白いと言っている。これは、「読み合い」によって人間関係が構築した証ともとれる記載ではないであろうか。

しかし、今回の分析と考察のように良い結果が得られたのは、「読み合

い」という活動が優れたものだったのか、履修していた学生たちが優れていたからなのかは判断がつかかねる。そのため、今後も多くのデータを集めて分析を重ねていく必要があると思われる。また、今回のデータはオンライン授業におけるものであり、教室対面授業における上級作文ではどのような分析結果となるのかも今後の課題としたい。この「読み合い」による気づきをどう成績に反映させるかは最も大きな課題として残っている。

参考文献

- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』ひつじ書房
- 石塚京子（2021）「オンライン授業における協働学習の可能性—「発表 5B」の reflection シートの分析を通して—」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要『日本語と日本語教育』第 49 号 pp.97-116
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2010）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第 2 版]』ひつじ書房
- 大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子（2014）『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション：プレゼンテーションとライティング』ひつじ書房
- 国際交流基金（2010）『国際交流基金日本語教授法シリーズ第 8 巻「書くことを教える」』ひつじ書房
- 野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房

資料 1 「Reflection1」

文中の下線は、以下の (1) ～ (5) の分類を示したものである。

資料 1, 資料 2 とも同じカテゴリーによって分類した。

- (1) _____ 他者の知識の再構成（他者の作文からの知識の獲得）
- (2) _____ 今後の文章作成につなげる知識の獲得（他者の意見からの知識の獲得）
- (3) ~~~~~ 読み手としての分析的視点の育成
- (4) ----- 社会的な人間関係の構築
- (5) その他

*個人情報保護のため、個人名が特定できるようなものをアルファベットや〇〇、××のように表記した。

学生 A

まず、私が提出したのは「日本の魅力」で、それについて、グループメンバーは洗練された言葉を使っていたが、(2) 結論がテーマから外れたと言っていた。実は、この前、私もややそう感じていたが、メンバーが教えてくれない限り、自分の考えが確認できないので、読み合いを通じていい勉強になった。また、(4) 他のメンバーに私の作文を読んだら神社に行きたくなると言われてとても嬉しかった。ただ、(3) メンバーの作文から問題点を探し出し、解決策を持ち出すことは想像以上に難しく感じた。色々な面白い作文を読み、いい経験ももらって本当によかったと思う。

学生 B

自分の作文について気付いたこと

同級生から貰った褒め言葉によると、(2) 私の作文の序文がよく書かれた だそうだ。〇〇について一片知らなくても序文さえ読めば〇〇の状況がすぐ分かる。さらに、作文のトピックは創意があって面白かった。ただし、話が難しいあまりに、具体的な言葉で書かないと〇〇の状況をまだ不完全に把握している人にしては分かりづらくなる。さらに、「寛容」という言葉が難しく、減多に見ないため、「最初に少し説明すればいいのではないか」という意見もあったが、そうすると構造が狂ってしまうのでこの意見だけは賛成できない。

他人の作文について気付いたこと

(3) 皆は以外と上級の文法を無理矢理に使おうとしない。そのため、皆の文章は流れが良くて分かりやすかった。ただし、(1) 語彙幅が非常に広い人もいたようで、自分の日本語力不足によって調べないことには分らない

いところがたくさんあった。さらに、対象者によって自分の思い出したトピックがすごく創意性で溢れているように見えても、自分の国の人に来ると以外とよく思い浮かぶトピックなので、自分の国のことについて書く際は創意性があるかどうかを確認した方がいいかもと気付いた。

学生 C

今回の作文の読み合いから新しく発見したことは、二つあります。一つは、(1) 皆さんは難しい語彙や文型が上手に使えることです。皆さんは本当にすごいと思って、勉強になりました。もう一つは、(5) 作文を読む人の視点や立場によって、感想は全然違うということです。例えば、「日本の魅力は何か」と考えたら、(5) 台湾人は最初に思い付いたのは「美しい四季」というところですが、日本人や他の国の人はそう考えていません。やはり作文を書くときや、スピーチをするときは、読む人と聞く人のことも考えなければならないと思います。

今日は皆さんはやはり日本語が上手だなと改めて思いました。(1) 自分ももっと日本語の本や文章を読んで、語彙や文型や文章の表現について、勉強しようと思っています。私も日本語が今より上達になりたいです。ところが、皆さんの作文を読んで、私はまだまだだと思っていますが、案外自分は割と面白いテーマを選んで作文を書く傾向があるらしいです。ポジティブに考えれば、(4) これは私の長所かもしれません。これからは引き続き日本語を勉強していくとともに面白い作文を書こうと思います。

学生 D

他の人の同じテーマの作文を見ることができた上で、段落構成や内容と比べることができ、(4) 自分の作文の良い点や違う点を知ることもでき、とてもいい勉強だった。(5) 時々、同じ段落でも、人によって、違う意見が出たことがあり、どちらの意見が良いかが分からないが、いろいろな意見

が聞けて、面白かった。また、自分が書いた作文に自信がなかったため、選ばなかった別のテーマにした作文を読むことができ、先生が私の評価表に書いてくれた意見がもっと理解できると思う。

学生 E

(2) 説明文を書くとき、まず構成を考えなければならない。 話題提起、論述、まとめが一般的だ。

話題提起の中で、話題よっての文章を占める長さも違う。全文の主な観点到一番相応しい部分は長めに、あまり関係ない部分は短めに書く。論述の部分でできるだけものを分かりやすく説明する。さらに洗練された書き言葉を使うとより良い。まとめの部分は全体の内容をまとめたうえで、自分の意見もまとめる必要がある。

学生 F

私は「日本の魅力は四季による変化」という作文をシェアした。Cさん、Gさんは私と同じように台湾人だから、この魅力が切実に感じられた。それに対して、ヨーロッパ人であるBさんはそれは日本の魅力とは思わなかったが、面白いと感じ、オリジナルな作文と思った。確かに、(5) この作文は、台湾人の視点から見る日本の魅力なので、日本人と同じ四季がはっきりしているヨーロッパに住んでいる人とは実感できないかもしれない。他に、Bさんが書いた「外国人」のように、作文を書く時は、人、事、物をはっきり指すべきだ。他に、Cさんがなぜ〇〇にならず、急に××を選んだという経緯が書いていないので、詳しく説明した方が良いと皆は思った。つまり、先生がおっしゃた通り、(3) 段落と段落の関連性を強くし、文章の一貫性に努力すべきだということだ。

学生 G

今回読み合った作文は、作文4の日本の魅力であった。本来はただ台湾人に日本の魅力的なところを紹介するつもりなので、台湾で見たことのないはっきりした四季の移り変わりに重点を置いたが、実は(5) 生徒たちが世界各地に住んでいるから、四季の変化に共鳴しない人は大勢いるかもしれないということを忘れてしまった。今度作文を書くとき、まず話したい相手を慎重に選び、従って相手に伝えたい内容を考えて作文をまとめるということを心がけている。

学生 H

18日の授業で同級生と共に作文を紹介し話し合った時に、(1) 私はクラスメートの文章の構成に驚いた。まず、彼らの接続詞の使い方がとても上手で、授業の後に彼が使用した接続詞を表に書いた。それ以外にも、(1)段落構成なども良くできていて、内容に段落ごとに区切りを付けていて、この点も勉強になった。その上、自分が提出した作文の問題点も適格に把握してもらって、(4) 最後の段落が内容的に問題を抱えていたことを彼らは見つけてくれた。このように(1) お互いの作文を比較することで、自分の間違いを見つけ出すことや書き方を工夫すること等を学んで、より読みやすい作文を書けるようになると思う。

資料2 「Reflection2」

学生 A

全体的に言うと、前回の読み合いと比べれば、今回はみんなの改善点が少なくなったので、アドバイスをあげるのも少し難しくなったことに気づいた。また、私の作文について、(2) CさんとFさんは問題提起に対して理由

や説明が少し足りない」と指摘した。それは私が書いた途中でも書き終わった後にチェックする時にも気づいていなかった点なので、やはり自分の視点より他人の視点を借りることが大事だと感じた。そして、(4) みんなが私の作文を通して、米国の銃撃事件に詳しくなって勉強になったと言ってくれた。それは、一人でも多くの人にこの現状を知ってもらえばと考えた私にとって、改めてこの文章を選んでよかったと思う。

学生 B

貰ったフィードバックは要するに (2)-1 「文章全体的に分かるために大事な言葉は説明した方がいいんじゃないか」と (2)-2 「段落の繋がりが分かりづらく、もう少し分かりやすくした方がいいんじゃないか」ということだった。

一番目のフィードバックは対象者または、言葉遣いの難しさ・珍しさによると思う。件の言葉は「検閲」であった。日本人向けの文章だと分かるのではないかと思うので (2)-1 この場合は変わらなくてもいいとする。

段落の繋がりのことは別の話だ。(2)-2 前回も言われた気がするので、事実に基づいていると思う。ただし、私が好むのは「1つ目、まず、つぎに」などという言葉を使わない書き方である。もちろん、場合によっては使うが、意見文といった筆者の身近な文章だとやはり自分の癖や好みも表したい。ただし、2回もこのフィードバックを貰ってどうしても「1つ目」などの言葉が使いたくなかったら (2)-2 自分なりにもっと繋がりがはっきりしているように工夫するべきだと思う。

学生 C

今回の作文の読み合いの感想は二つあります。一つは、(1) 皆さんは普段からいろいろ考えていることです。恥ずかしながら、私はニュースにあまり関心を持っていない方ですが、皆さんの作文を読んで、やはりニュース

について、もう少し関心を持った方がいいと改めて考えていました。本や文章と同じで、ニュースを見ることで、知識が豊かになるだけではなく、日本語の読解力や日本語の作文を書く能力も上がると思うので、これからはもっと頑張って勉強したいと思っています。もう一つは、説明文や意見文を書いて、(2) 例を挙げる時、自分の本当に経験したことや具体的なことを例として書くと、説得力があるので、これもいい作文を書くポイントの一つではないだろうかと思っています。

今学期の作文の授業がもう終わりましたが、これからも引き続き日本語の勉強をしていき、そして作文を書く能力も今より高くなるように頑張りたいと思います。

学生 D

私の作文

1. 内容として面白く、文章の流れが自然だと言われた。
2. 一部の文章が長すぎて、理解できるのに時間がかかったと言われた。

Bさんの作文

1. 文章の最初に (1) 他の文言を引用して書くという方法を真似してみようと思う。
2. (3) 内容がとても豊かだが、段落のつながりが不自然で、最後まで読まないと文章に書かれた例の意味が分からない。

Gさんの作文

1. 言葉を使う前に、その言葉に関する言い換えがあるかどうかを探して使い、言葉の幅が大きくなるかもしれない。

Hさんの作文

1. 今度の作文がとてもよくて、別人が書いたものと感じるほど驚いた。
2. 理由と例をうまく組み合せて、自然に書いた。
3. テーマに関する言葉がうまくたくさん使った。

学生 E

意見文は説明文と大分違うことを改めて実感できた。説明文はただ出来事を述べるのに対して、意見文はさらに自分の考えを加えなければならない文章になっている。そして、意見文は説得力が大切で、論理的な書き方が求められる。(5) 自分の頭の中で、すでに当たり前だと思うことも、他人にとって理解できない部分があるかもしれない。なので、意見文を書き終えてから、もう一度他人の視点から意見文を読む必要があると思う。

学生 F

今回の読み合いにより、本当に勉強になったと思う。Aさんのアメリカの銃規制とCさんの外国語の勉強とEさんの独立的な思考力という作文を読み、意見を交換し、幅広い知識を吸収した。

(3) 私たちの作文は補足説明が必要だという点では同じである。例えば、私は「日本でサークルや交流会などに参加するとき、いつもコミュニケーション能力の重要性が感じられる。」と書いているが、(3) どのような状況や場面に触れていない。つまり、重要性が感じられる理由を書いた方が良い。私は(2) 詳しく説明したり、具体例を挙げたりすると、理解しやすいだけでなく、文章の説得力も高めると思う。

学生 G

二回目の作文の読み合いで、皆一回目のように一人一人順番で自分の選んだ作文を読むことはしていなかった。それによって、時間がより余裕であったから、お互いの作文の評価に集中することができた。今回選んだ作文は最後の作文8・「なぜ」の意見文である。Bさんは前回と同じ、色々作文を作っていた時全く気づいていなかった問題点を私に聞かれ、(2) 私の挙げた例の因果性に対する説明が足りないということについて注意され

た。とてもありがたいと思う。また、他のグループメンバーたちの作文を見ると、皆それぞれの考え方と興味を持つ議題も一目瞭然なので、作文の読み合いをすることが書くことよりずっと面白いと考えている。

学生 H

皆と作文を比較した時、Dさんが(4) 私の作文が以前の読み合いから上達して、別人のようだと言ったことが一番印象に残った。色々と自分の日本語習得の進歩で悩んでいる今、このようなコメントを同級生から聞いたのはとても嬉しかった。(4) Dさん以外のメンバ=にも変化するところがほほ
ないと言われたので、その点でも少しは自身を持つことができたと思う。
そのようなことを言ってもらっているのは嬉しいが、まだ(4) 自分が満足することができる段階ではないので、これからももっと作文を書きたい
と思った。